

## 〈親愛なる同居人〉

露露（ルル）は昔から睡眠の質が芳しくなかった。数秒で眠りにつける人がいる一方で、彼女はベッドの上で何度も寝返りを打ち、ようやく微睡みの淵に辿り着く。たとえ眠れたとしても、支離滅裂な夢ばかりを見て、その内容を鮮明に覚えているせいで、起きた時には寝た気がしないのが常だった。

親しい友人たちからは、安眠に効くという方法を山ほど教わった。ホワイトノイズ、寝る前のホットミルク、スマホ断ち、日中の適度な運動、ラベンダーの香り、ツボ押し……。そのすべてを試したが、眠れないものは眠れない。

トリプトファンを多く含む食材を意識して摂り、病院にも通つ

たが、処方された睡眠導入剤も次第に耐性がついてしまい、効果は薄れていくばかりだった。

「すぐ眠れる人が羨ましいなあ……」

ルルは力なく呟いた。花の女子大生という年齢でありながら、目の下のクマはメイクでも隠しきれない。一年の頃、女子寮のルームメイトにすっぴんを見せた際には、「パンダなの？」と驚愕されたほどだ。

ルル自体は、潤んだ瞳にツンと上を向いた鼻、ぷつくりとした唇を持つ可愛らしい顔立ちをしている。しかし、そのクマのせいで、全体の雰囲気にはどこか退廃的な影が落ちていた。

そんな彼女にとって、一年の下半期に寮の継続抽選に漏れ、外で部屋を探さなければならなくなったことは、ある意味チャンス

だった。最大の願いはただ一つ。「安心して眠れる部屋」を見つ  
けること！

部屋の風水や磁場が睡眠に影響するという噂を信じ、自ら探  
し、不動産屋にも足を運んだ。そしてようやく、直感で「ここだ」  
と思える、家賃も手頃で家具付きのワンルームに入居を決めたの  
だ。

十坪ほどの広さの部屋を、彼女は低いキャビネットで仕切り、  
寝室とリビングに分けた。ベランダには洗濯機があり、キッチン  
はないものの小さな冷蔵庫は完備されている。「雀の涙ほど小さ  
くても、五臓六腑は揃っている」という言葉通りの、理想的な空  
間だった。

ルルは新居をいたく気に入り、あとはここで一度も目覚めるこ

となく、深く、朝までぐっすりと眠れさえすれば、文句なしだった。

「神様、もしここでちゃんと眠れるなら、私、なんだってします」

シャワーを浴び終えたルルは、パジャマ姿で長い髪を垂らし、両手を合わせて祈った。儀式めいた気分を高めるために、ナイトテーブルにはアロマキャンドルを灯してある。

カーテンを引き、明かりを消し、冷房を入れる。枕の高さは完璧、羽毛布団は柔らかく、マットレスの弾力もちょうどいい。すべてを確認し、ルルはベッドに横たわった。新生活の第一夜が、安らかなものになるよう心から願いながら。

意識が暗闇に溶け始めた頃、彼女は夢を見た。リビングのソフ

アに誰かが座り、彼女に手招きをしている。長い前髪のせいで顔は判然としないが、不思議と恐怖は感じなかった。それどころか、吸い寄せられるようにその人物の元へ歩み寄っていく。

「さあ、おやすみ」

その人は優しく囁いた。低く、心地よいバリトンの声だった。ルルは言われるがままに横たわり、相手の膝の上に頭を預けた。夢の中の彼女は目を閉じ、大きな手が自分の長い髪を優しく撫でてくれるのを感じていた。

それは、この上なく心地よく、温かな夢だった。

翌朝目覚めたルルは、自分が朝まで一度も起きずに眠り続けたことに驚喜した。頭の重さは消え、瞳の奥の痛みもない。全身に力がみなぎり、最高に爽やかな気分だった。

「すごい……奇跡みたい！」

信じられないといった様子で声を上げる彼女の瞳には、星のような輝きが宿っていた。

その日だけでなく、数日間、彼女の眠りは深く、そして甘かった。友人とのビデオ通話でも、「顔色がすごく良くなった」「クマが薄くなった」と評判だった。

あまりの嬉しさに、ルルは仲介してくれた不動産屋に感謝のメッセージを送った。すぐに返信が届く。入居を祝う言葉と共に、一点だけ、気になる一言が添えられていた。

『——悪夢は見ませんか？』

ルルは、この部屋に来てから毎晩見ているあの夢を思い出した。顔の見えない男の膝を枕にし、頬や肩、背中を優しく撫でら

れる、親密で温かな夢。

（あれが悪夢なわけじゃないじゃない）

\*\*\*

ルルは気に留めることもなく、昼間は学内の事務局でアルバイトをし、午後は帰宅するという平穏な夏休みを過ごしていた。この夏、彼女はこれまでの不眠を取り戻すかのように、たつぷりと眠るつもりだった。

その夜、夢の中の彼女はいつものように膝枕を楽しみに行こうとした。しかし、相手に近づこうとした瞬間、手首を強く掴まれ、そのまま下へと引きずり倒された。

次の瞬間、視界が激しく回転し、ルルはソファに押し倒されていた。男の前髪が顔の半分を覆っているが、わずかに覗く鼻筋と

唇が見える。その唇は、嘲笑うかのように弧を描いていた。

両手を押さえつけられ、男の体重に圧迫された身体は、どれほど抗つても動かない。穏やかだった夢がなぜ突然変調したのか理解できず、ルルは怯えた瞳で見上げるしかなかった。男の顔が、ゆつくりと、確実に近づいてくる。

「――何だつてする、と言つたよね？」

男が口を開いた。

「ひっ！」

ルルは叫び声を上げて跳ね起きた。目を開けると、窓の外は白み始めており、遠くから人の話し声や車の走行音が聞こえてくる。光と音が、彼女を現実へと引き戻した。

彼女はベッドの上に座り込み、自分の頬をパチリと叩いた。



「……変な夢」

ルルは深く考えないことにした。今日は日曜日、大学のバイトもない。ゆつくりと身支度を整え、トーストを焼き、たっぷりのイチゴジャムを塗ってジュースと共に味わう。

シンプルだが美味しい朝食に満足した彼女は、溜まっていた洗濯物を持ってベランダへ向かった。洗濯機を回し、柔軟剤の甘い香りが漂い始めると、規則的な駆動音が響き出す。

リビングに戻ったルルは、ソファに寝転んでスマホを眺めていた。窓から差し込む陽光と、エアコンの涼風が混ざり合い、この上なく心地よい。

「これこそが人生よね」

液晶テレビをつけ、動画配信サービスの映画をBGM代わりに

流しながら、SNSのタイムラインをスクロールする。

心地よい静寂の中で、不意に強烈な眠気が襲ってきた。少しだけ昼寝をするのも休日の特権だと思い、彼女は目を閉じた。

長い睫毛が影を落とし、ルルは微睡みの中へと沈んでいく。

半睡半醒の状態。ふと、胸のあたりに痺れるような感覚が走った。まるで、冷ややかな大きな手が、服の上から滑らかな乳房を直接包み込み、ゆっくりと揉みしだいているような……。

（でも、私、服を着ているのに……夢かしら？）

彼女が小さく鼻を鳴らした瞬間、乳首を指先で捻り上げられる鋭い戦慄が走った。

あまりの心地よさに、もっと強くされてもいい、とさえ思ってしまう。

ルルの頬が朱に染まり、眉が耐えがたげに寄せられた。夢だと思ひ込もうとするが、洗濯機の唸る音ははつきりと耳に届いている。階下で遊ぶ子供たちの無邪気な叫び声さえ聞こえる。

ルルはハツとして、薄く目を開けた。そこには誰もいない。しかし、再び目を見開いた彼女が見たものは、現実だった。

自分の豊かな胸の膨らみが、まるで「透明な手」に捏ねられているかのように、淫らな形へと次々に歪められていたのだ。

「そんな、嘘でしょう!？」

ルルは完全に覚醒した。手を動かそうとするが、まるで鉛のように重く、びくともしない。起き上がろうとしても力が入らず、全身が何かに縛り付けられたかのような感覚に陥る。

(これって、金縛り……?)

背筋を蛇が這うような恐怖が駆け巡る。しかし、それ以上に、執拗に弄られる胸の快感が彼女を支配していた。

「だめ……いけない……っ」

必死に身体を動かそうとするが、無形の力は彼女を逃さない。金縛りを解くには「罵倒する」のがいいと聞いたことを思い出し、ルルは意志を振り絞って口を開こうとした。

ようやく唇が割れ、第一声が喉から出ようとしたその時――彼女の口は、唐突に「何か」で塞がれた。

それは、まるで誰かにキスをされているような感覚だった。

「んんっ……！」

ルルは頭を振って抵抗しようとしたが、その隙を突いて湿った舌が侵入してきた。歯列をなぞり、上顎を這い、口腔内を隅々ま

で舐めまわした挙句、彼女の舌を捉えて激しく絡みつく。

（嫌……嫌よ！）

押し返そうとするが、逆に強く吸い上げられ、色っぽく弄られる。

唇を奪われているだけでなく、見えない両手もまた、遠慮なく胸を揉みくちやにしていた。

呼吸が荒くなり、熱が首筋から頬、耳元まで広がっていく。怖いはずなのに、身体は裏腹に快感に染まり始めていた。

「ちゅ、じゅる……っ」

口内をかき回す舌が淫靡な水音を立てる。その音は脳内で増幅され、下劣なほど煽情的に響いた。

睡眠不足で恋愛どころではなかった彼女にとって、これほど濃

密な接吻は初めての経験だった。強引に吸い込まれる感覚に、次第に抗う力が削ぎ落とされていく。

（気持ちいい……舌を吸われるの、すごく……）

ルルは幽霊の接吻に溺れかけていた。柔らかい舌は先端から根元まで執拗に舐め上げ、さらに深部へと潜り込もうとする。

まるで喉の奥まで侵されるような感覚。

「ふ、あ……んぐ、ん……っ」

咽頭反射に涙を浮かべながらも、苦しさや快楽が混ざり合い、頭が真っ白になる。

飲み込めない唾液が口角から溢れ、顎を濡らす。その瞬間、口内の舌が引き抜かれ、今度は滴る蜜を舐めとり始めた。

「はあ、はあ……っ」

ルルは激しく息を乱し、わずかに動くようになった首を横に振った。

しかし、その自由は、幽霊が彼女の胸を揉みしだく様子をより鮮明に見せつける結果となった。

透明な手が、彼女の柔らかな膨らみを生地の上から捏ね、押し潰している。

見えない舌が、顎から首筋へと滑り落ちた。細かな痺れに彼女は小さく喘ぎ、強烈な羞恥心が湧き上がる。

（こんなの、おかしい……怖いのに、どうして……っ）

春雨のような細かなキスが全身を這い、幽霊の唇は挑発するように何度も彼女の肌を吸い上げた。曖昧な吸い音が鼓膜を震わせる。

やがてその唇と舌は、雪のように白い乳房へと辿り着いた。まるでご馳走を味わうように、服の上から大口で吸い付く。

「ひゃあぁっ……!!」

ルルは呻きを抑えきれなかった。自分で触るのとは全く違う、細かな電流が走るような刺激。

「ん、あ……だめ、はぁっ……そんな、吸っちゃ……だめ……っ！」

快感から逃れようと首を逸らすか、幽霊はそれを嘲笑うかのように、彼女のボタンを一つ一つ解いていった。

左右に開かれた服の中から、白生しい胸が陽光の下に晒される。肌に残った水滴が、これが幻覚ではないことを物語っていた。



「やだ……っ！」

顔を真っ赤にし、隠そうとするが、手は依然として金縛りにあったように動かない。剥き出しの乳房が一口ずつ吸い上げられ、赤い痕が刻まれていく。透明な大手に掴まれ、激しく揺さぶられる自分の身体。

本当に、「誰か」がここにいて、私の胸を吸っている。

目に見えるものは何もない。次の一手が予測できない恐怖。

しかし、舌先がピンク色の乳輪を執拗になぞり始めると、ルルの心臓は早鐘を打ち、我慢は限界に達した。

「はあっ、あ……乳首……乳首も舐めて……お願い、吸って……っ！」

快楽への渴望が、ついに恐怖を塗り潰した。

幽霊は望み通りに片方の尖端を口に含んだ。強く吸い上げるだけでなく、歯を立てて細かく削る。その刺激で、そこは赤く、屹立した形に腫れ上がった。

もう片方も無視されることはなかった。指先で捻られ、弾かれ、痺れるような火花を散らす。

唇、歯、指。それらが交互に彼女を襲い、ルルの顔は一瞬で情欲に染まった。

視界は涙で霞み、小さな口からは絶え間ない嬌声が漏れる。白く柔らかな胸には、牙の跡や指の痕、そしてキスマークが星のように点在していた。

「あ……ん、ああ……胸、気持ちいい……幽霊さん、吸うの、上手……っ、ああ、んんっ……!!」

人生で初めて味わう快感に、彼女はなす術もなく溺れていた。

外では陽光が輝き、洗濯機の音が響いている。それなのに室内では、淫らな春の色が充満し、ルルはソファの上で幽霊に蹂躪されていた。

下半身の疼きは耐え難いほどになり、腿の間には明らかな湿り気が広がっていた。胸を吸われるだけで、頭が真っ白になるほどの快感を覚えるなんて、想像もしていなかった。

乳首は粗い指の腹で強く引っ張られ、爪が小さな穴を執拗に掻く。そのたびにルルの声は甘く溶け、まるで蜜に浸かっているかのように響いた。

同時に、彼女は腿の間に「硬く、重いもの」が押し付けられて

いるのを感じた。

その巨大な熱量は無視できない存在感を放ち、乳首を吸い上げるリズムに合わせて、彼女の股間を何度も打ち付けていた。

ルルはそれが何であるかを知らないほど純真ではなかった。

腿の間を激しく突き上げられ、小尻（こび）は震えながら蜜を吐き出す。下着の中の湿りは、刻一刻と広がっていく。

（幽霊の唇が服を透過するなら……あの、肉棒（ペニス）も……まさか？）

その考えが脳裏をよぎった瞬間、ルルは現実に取り戻されるように目を見開いた。

真昼間から幽霊に弄ばれ、恥も外聞もなく求めてしまった自分。もし本当に「挿入」されたら、自分はどうなってしまうのか。

「動いて……お願い、動いてよ……！」

心の底で叫ぶが、幽霊は彼女の抵抗を察知したかのように、胸を吸う口を止めた。

ふっと湧いた喪失感に戸惑う暇もなく、透明な手は彼女の豊かな両乳を中央へとかき集め、二つの乳首をぴたりと密着させた。

次の瞬間、幽霊はそれをまとめて口に含んだ。